

命と向き合い 命をつなぐ

命を実感する機会に
直面する時
どう向き合うのか。
頂いた命をつないでい
く大切さを考える。

命の授業

「無理して見なくていいから
ね。」という声掛けから始まった
命の授業。

辺りには「ガシヤン、ガシヤ
ン」と鈍い音が響いている。イ
ノシシはおりに突進し鼻先を血
で濡らしながらも威嚇を続ける。
農家ハンターの井上拓哉さん
(26)が静かに電気やりを手を取
る。「ピー、ピー」という警告音
から数秒後、辺りは静けさに包

まれると、イノシシの動きは止
まっていた。

言葉が詰まらせる井上さんに
代わり、稲葉さんが口を開く。
「命の重みが段々と棒から伝
わってくるよな。今はみんな
がおるけん、平静でいられるけ
ど、普段は一人、二人で里山へ
行く。静けさの中では、いろん
なこと考えてしまう。大人は向
かってくるけど、子どもは何も
分からんで、何だろうつて顔し
とる。毎日、何頭もこんなこと
しよったら、俺何しよるとだろ

うか、本当にこれでよかとか
なて…。いつも自問自答を繰り返
しとるよ。」

「いつまでも慣れるものでは
ありません。慣れては危ない。」
と、井上さんは続けた。

捕獲すれば必ず訪れる、 命と向き合う瞬間。

命の重さに心は揺れ、追い詰
められる。
奪っていいのだろうか――。
これは人間の都合――。
農地を守ることは本当に正しい
ことなのか――。

仕掛けた箱わなにかかっていた
イノシシ。
予定にはなかった命の意味を問
う授業が始まった。
生徒たちは命の瞬間を目をそら
さず見つめていた。



考え出せばきりが無い。使命
感だけではやりきれない苦悩は
いつまでもつきまとう。

処分の心苦しさ

「対策で誰もが嫌がるのは
やっぱり命を止めること。そし
て処分せななこと。対策とはい
え、命を頂いたのなら、きちん
と活用し無駄にしてはいけな
い。」

命の重みを学んだ生徒たち
は、「温かい」と横たわる命に触
れ、その場を後にした。

命を生かす

これまで捕獲者が自家消費す
る以外の処分方法は、地中に埋
めることが多かった。

三角町では地域住民と合わせ
て年間900頭以上の捕獲実績
があるが、その多くは農家ハン
ターが運営する鳥獣解体施設
「ジビエファーム」に持ち込んで
いる。しかし、食用にできるの
は150頭程度。
農家ハンターが立ち上げた株

株式会社イノPでは、食肉以外の
活用にも力を入れる。
精肉時に筋や骨、脂と切り分
けられ、集められる。硬い肉や
筋は堆肥、骨は犬のおやつ、油
はせっけんに。なめした革はマ
スクケース。廃棄部位の活用方
法の模索は処分問題の改善にも
つながっている。

自然の中で育まれたイノシシ
の皮を丁寧になめし「革」とし
て生まれ変わらせ、大切な命
を継いでいく。
革に見入るのは地元三角小の
児童たち。

